著作権保護コンテンツ

―ことのは―

『ことばコレクター』
作／ピーター・レイノルズ
訳／なかがわちひろ
1,650円（ほるぷ出版）
ジェロームは言葉を集めています。音やリズムや響きがすばらしいものを、きちんと種類ごとに分けていきました。ところが、すってんころりん！ 転んだ拍子に全部、飛び散ってしまいました。

『絵くんとことばくん』
作／天野祐吉
絵／大槻あかね
1,430円（福音館書店）
4年生の少年は、現在500円のおこづかいを1,000円に値上げしてもらおうと思案中です。ポスターをつくってキッチンに貼り、お母さんに訴えようという作戦にでました。どんなポスターができあがるでしょうか？

『ことばのかたち』
作／おーなり由子
1,485円（講談社）
もしも話す言葉が目に見えたなら、どんな形をしているでしょう。たとえば、美しい言葉は花びらの形、人を傷つけてしまう言葉は針の形。なにげなく発した言葉を相手がどう受け止めるかでも変わってしまいそうです。

『ことばのはじまり!! 語源大図鑑』
編／国土社編集部
監修／青山由紀
4,400円（国土社）
日本語は、もともと日本にあった「和語」と、古い時代に中国から入ってきた「漢語」と、ヨーロッパやアメリカから入ってきて日本語として定着した「外来語」の3つからできています。ややこしや……。

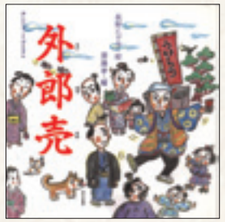
『ひらがなさん、じけんです!』
作／正高もとこ
絵／市原 淳
1,540円（くもん出版）
みんな仲よしのひらがな村である日、「む」や「か」や「え」のてんがなくなってしまいました。次の日は「に」や「は」や「ほ」の、左側がなくなっていました。犯人は誰なのでしょうか？

『もし、世界に わたしが いなかったら』
文／ビクター・サントス
絵／アンナ・フォルラティ
訳／金原瑞人
1,980円（西村書店）
私は何百年も前に生まれ、人々の暮らしに寄り添ってきました。私は言葉。ひとつの言語が滅びると、ひとつの文化が滅びます。世界の言語のうち、文字で書きとめることができるのは、57%にすぎないそうです。

『まく！ まく？ おなじよみで、ちがういみ』
作／市原 淳
1,540円（創元社）
ワニが音楽をかけながら、時間をかけて、手間暇かけてじっくりつくったホットドッグ。マスタードをかけてケチャップもかけて、イスに腰かけて「いただきます」。日本語はなんて同音異義語が多いのでしょう！

―日本のことば―

『声にだすことばえほん おっと合点承知之助』
文／齋藤 孝　絵／つちだのぶこ
1,485円（ほるぷ出版）
「おっと合点承知之助」や、「恐れ入谷の鬼子母神」「その手は桑名の焼き蛤」などは、つけ足し言葉といいます。相手の言葉に対して発する、合いの手のような元気の出るものばかりです。



『声にだすことばえほん 外郎売』
絵／長野ヒデ子　編／齋藤 孝
1,485円（ほるぷ出版）
外郎売（ういろうう）は1718（享保3）年に初演された歌舞伎の演目。飲むと口が回りだして止まらなくなる丸薬「ういろう」を売るために、てんこ盛りの早口言葉をまくしたてます。

『ことばさがし絵本 あからん』
作／西村繁男
品切れ中（福音館書店）
「あんぜんちたいで あさのあいさつ」「うめのはなさきうぐいすと うた うたう」など、「あ」から「ん」まで、楽しいあたまとり言葉のオンパレード。

『日本語 あそび学 平安時代から現代までの いろいろな言葉あそび』
監修／倉島節尚　著／稲葉茂勝
絵／ウノ・カマキリ
1,980円（今人舎）
語呂合わせはもちろん、かけ言葉、あたまとり、畳語（じょうご）、アナグラムなどが盛りだくさん。ぎなた読み、山号寺号などは古くから楽しまれてきた言葉遊びだとか。

『日本のことばずかん はな』
監修／神永 暁
2,750円（講談社）
はなと聞いて思い浮かべるのは、桜？ お花見？「花がすみ」「花いかだ」「花ふぶき」など、桜に関する言葉だけでもたくさんありますね。ユニークな名前の植物も紹介されています。

『日本のことばずかん あじ』
監修／神永 暁
2,750円（講談社）
「五穀豊穣」や「早苗」など、田づくりから生まれた言葉や、台所道具の名前、文学に登場するおやつの名前。食べものを詠んだ短歌など、言葉にもさまざまな味わいが。

著作権保護コンテンツ

2024年 新刊 クリスマス絵本

続編・2024年

『しごとを なくした サンタさん』

作／スティーヴン・クレンスキー
絵／S. D. シンドラー
訳／こみやゆう
1,870円（好学社）

子どもたちへおもちゃを届ける仕事をしていたサンタさんですが、段取りが悪くて小人たちから不満の声があがりました。そこで、自動宅配飛行船とサンタさんのどちらが効率よくプレゼントを配れるか、勝負をすることになりました。

2023年

『しごとを みつけた サンタさん』

作／スティーヴン・クレンスキー
絵／S. D. シンドラー
訳／こみやゆう
1,760円（好学社）

サンタさんが若かったころ、煙突掃除や郵便配達、動物園といろいろな仕事につきました。けれど、どれも長続きしません。サーカスをクビになったとき、小人たちが家に招待してくれました。

『うまやの クリスマス』

文／マーガレット・ワイズ・ブラウン
絵／バーバラ・クーニー　訳／松井るり子
1,650円（好学社）

いちばん星が明るく輝く夜のこと、ひとりの赤ちゃんが誕生しました。動物たちにもお祝いされ、その赤ちゃんは多くの人々に愛されました。

『えがかわる しかけえほん びっくり クリスマス』

絵／アドリア・メザーブ
1,540円（岩崎書店）

矢印を下に引っ張ると、びっくり仰天の華やかな仕掛けがあらわれます。小さな子と会話しながら読み進められます。

ロングセラー

『ぐりとぐらのおきゃくさま』

作／なかがわりえこ　絵／やまわきゆりこ
1,100円（福音館書店）1967年

森の中で見つけた大きな足跡は、なんとぐりとぐらの家まで続いていました。玄関に入ってみると、いい匂いがします。台所では白いヒゲの大きなおじさんが料理をしているようです。

『よるくま クリスマスのまえのよる』

作／酒井駒子　1,210円（白泉社）2000年

自分のところにはサンタさんは来ないかもしれないと不安な男の子。眠れないでいると、そこへよるくまがやってきます。よるくまはサンタを知らないというので、クリスマスツリーを見せてあげました。

『ゆきのもりの おくりもの』

文・絵／リンデ・ファース　訳／西村由美　2,090円（岩波書店）

ソフィーはクリスマスの朝、すてきなことを探しに森へ出かけました。そこでヘラジカに出会い、大きな森へと誘われます。森ですばらしいことを思いつきました。

『さがしえ えほん クリスマスみ～つけた！』

作／おかじまちはる
1,540円（ポプラ社）

双子のクリスとマリーは、クリスマスパーティーの準備のため、町へお買い物に出かけました。にぎやかな商店街の中から、お目あてのものは見つかるでしょうか。

『さむがりやのサンタ』

作・絵／レイモンド・ブリッグズ
訳／すがはらひろくに
1,320円（福音館書店）1974年

12月24日の朝、バカンスの夢を見ていたサンタは時計のベルで起こされます。トナカイたちにエサをやり、朝ごはんを食べて、「寒い寒い」と言いながら出発の準備をします。

『サンタおじさんの いねむり』

作／ルイーズ＝ファチオ
文／まえだみえこ
絵／かきもとこうぞう
1,320円（偕成社）1969年

サンタさんはプレゼントを配りながら、途中でちょっと休憩。サンドイッチとあたたかいコーヒーをいただきました。おなかがいっぱいになったと思ったら、なんだか眠くなってしまい……。

『ちいさなもみのき』

作／マーガレット・ワイズ・ブラウン
絵／バーバラ・クーニー
訳／かみじょうゆみこ
1,210円（福音館書店）1993年

森のはずれに小さなモミの木が立っていました。種が風に運ばれて根を張り、7回目の冬が過ぎたころ、男の人がそのモミの木を切って家に運びました。

『まどから おくりもの』

作／五味太郎
1,100円（偕成社）1983年

サンタさんは、窓から見える動物たちにプレゼントを配ります。穴あきの部分から見えているものが、本当は違っていて、意外性が楽しめます。

『ゆきのひの プレゼント』

作／たなか鮎子
1,650円（世界文化社）

おなかをすかせた雪の妖精スノーイーは、町でケーキ屋さんの男の子、ピコと知り合いました。ケーキをごちそうしてもらったお礼に、ピコを氷のお城に招待しました。

読みもの

『クリスマス・キャロル』

著／チャールズ・ディケンズ、オスカー・ワイルド
訳・著／村岡花子
1,980円（講談社）

金の亡者のスクルージが主人公のディケンズの表題作と、ワイルドの「しあわせの王子さま」を村岡花子さんの訳で。村岡さん作の「さびしいクリスマス」も合わせ、3編収録。

『はじめまして、サンタさん』

作／ジャーヴィス
訳／まきもりれい
1,870円（岩崎書店）

リビングでサンタさんに会えた女の子は、飼っている魚たちを紹介したり、笛を吹いて聞かせたり、一緒にクッキーを食べたり、楽しい夜を過ごします。

『はじめての クリスマス』

文／マック・バーネット
絵／シドニー・スミス　訳／なかがわちひろ
1,760円（偕成社）

世界じゅうの子どもたちにプレゼントを配り終わったサンタは、家に帰り眠るだけ。翌日からは、またおもちゃづくりが始まります。そんなサンタに楽しいクリスマスをプレゼントしたいと思ったエルフたちは……。

著作権保護コンテンツ

もう読んだ？

新刊100!!

2024年6～8月に発売された新刊絵本の中から、読みきかせにもおすすめの100冊を選びました。子どもたちとすてきな時間を過ごしてください。

※出版社五十音順　※右は右開きの本。

マークは乳幼児から、は中・高校生も楽しめる本です。

定期購読者限定プレゼント

新刊絵本プレゼントの詳細は、このページの下欄をご覧ください。

『空気を変える 地球で生きつづけるために、今わたしたちができること』

文／デビー・リヴィ
絵／アレックス・ボーズマ　訳／宮坂宏美
1,870円（あすなろ書房）

炭素は燃やすと二酸化炭素になります。地球に悪影響のある二酸化炭素を取り込み、地球を助けているのはコンブ・マングローブ・土の3つです。では、人間は何ができるのでしょう？

『ビーチサンダル号 海へ！ プラスチックゴミから船をつくった少年』

文／L・R・ロッディング、D・パバリー
絵／M・M・ムワンギ　訳／千葉茂樹
1,870円（あすなろ書房）

ケニアに住む少年ジュマは、海岸に流れ着くたくさんのビーチサンダルで船をつくれないだろうか？と考えました。集めた10トン近くのプラスチックゴミを溶かして固め、ビーチサンダルをのばしたシートで船体を覆えば完成です。

『ねこねこねこ ねこねこねこ』

著／北村 人
1,650円（アノニマ・スタジオ）

「0」というだーれもいないところから、ひとつずつ数が増えていきます。「1」は、ゾウ1頭だけど、「2」はリンゴ1個とクマ1頭。「3」は……と、いろいろな組み合わせで数を紹介していきます。最後に10の動物が勢ぞろいします。

『くまくまパンまつり』

作／西村敏雄
1,540円（あかね書房）

今日は年に一度のパンまつりの日。くまさんとしろくまさんはできたてのパンを車に積んで出発です。森の広場には、動物のパン屋さんが集まってにぎやかです。みんなは持ってきた食べものと好きなパンを交換します。

『きょういちにちの ラッタッタ！』

人形／柚木沙弥郎
絵とことば／荒井良二
1,870円（アリス館）

今日一日の朝が来て、オペレッタが始まります。ここの街は輝いていて、広場に集まる人たちもみんな生き生きしています。元気のスイッチをぱっと入れて、ラッタッタ　ラッタッタ！　夜が来るまで続きます。

『ジャジャーン！』

作／いわいまき
絵／山口マオ
1,430円（あかね書房）

あらあら、誰かがカーテンの向こうに隠れています。にょろにょろしているのは誰かな？　ジャジャーン！　カーテンをあけたらヘビでした。さあ、お次は誰でしょうか？ 正面と横向きのシルエットをよーく見てください。

『こまった こまった』

文／ふしみみさを
絵／山村浩二
1,540円（アリス館）

おねしょをすると顔にかかってしまうコウモリ、握手がうまくできないタコ、ポケットの中を片づけられないカンガルー。あらら、お風呂が大嫌いで黒ウマになってしまったシマウマ。みんな何かに困っています。

『ともに生きる 山のツキノワグマ』

右

写真・文／前川貴行
1,650円（あかね書房）

日本にすむ100種類くらいの鳥や動物たちを写真に撮ってきた動物写真家が、本州と四国では敵なしの野生動物、ツキノワグマの姿を追いかけました。変化してきている人と動物の関係。ともに生きることを考えるきっかけになるでしょう。

※JPIC直販の定期購読の方に、抽選で新刊絵本100冊から1冊をプレゼントします。巻末のアンケートハガキまたはホームページのアンケートフォームから応募してください。

今号の注目

『ぼくのひみつの ともだち』

作／フレヤ・ブラックウッド
文／椎名かおる
1,870円（あすなろ書房）

街中の建物と建物の間に小さな森がありました。そこにゾウがいることを知っていたのは隣に住む少年だけです。ある日森は売り出され、木は切られることになりました。大事な友だちを守るため、少年は考えました。

編集の山浦真一さんより

原書を見た瞬間、心をわしづかみに！　でも原書は文字なし絵本。絵を丁寧に読むことに慣れていない人には伝わりにくいかも……という懸念も同時に湧いてきて、読者を助けるヒントになるような短い文章をつけては？　と編集部で話し合いました。今、注目のケイト・グリーナウェイ賞受賞作家の作品。版権がとれるかどうか、また日本版オリジナルの文章も許可が得られるかが心配でしたが、無事クリア。言葉が絵の邪魔をしないように細心の注意をはらいました。

『地球に暮らす ぼくたちへ』

作／中川ひろたか
絵／松田奈那子
1,705円（アリス館）

ぼくたちは、地球という星で、命をつないできました。これから先も、生きていかなくてはなりません。さまざまな人々も、生きものたちも一緒です。みんなが、等しく、楽しく、自由に、幸せに生きていくために、今、もう一度考えてみませんか。

『ふきふき ぱっ！』

作／矢野アケミ
1,210円（アリス館）

バスが出発しようとしたとき、ばっしゃーん！と泥がとんできました。バスの窓は泥だらけ。そんなときはぞうきんを持って、「ふきふき　ふっふ」と拭いてあげましょう。きれいになった窓から、誰が見えるかな？

『にじ』

監修・写真／武田康男
構成・文／小杉みのり
1,430円（岩崎書店）

雨あがりに音もなく空にあらわれる虹。雨がやんで晴れてきたら太陽と反対側の空に見ることができます。虹は雨のカーテンに映った太陽の光。たくさんの色が生まれる秘密は、雨粒の不思議なレンズにあります。

『ポコペン！』

文／ギョウ・ヤマグチ
絵／いしいつとむ
1,870円（イマジネイション・プラス）

公園で友だちと缶蹴りをして遊んでいるまあくん。鬼になったまあくんはいつまでたっても「ポコペン！」と言えず鬼のまま。するとトムくんが「鬼ばかりじゃつまんないよね」と鬼役を代わると言ってくれました。

『ねこ にゃん これなーんだ？』

作・絵／ももろ
1,320円（岩崎書店）

「これ、なーんだ？」「ねこ　にゃん」。ネコ、ゾウ、コップ……と、次々に出てくるシルエットを見て、あてっこしながら楽しめます。でもページをめくると、驚きの答えばかりです。

『私は十五歳』

原案／アズ・ブローマ
絵／なるかわしんご
1,870円（イマジネイション・プラス）

迫害され、命の危険があるために日本にやってきたのに、難民と認められない人たちがいます。在留資格も認められず「仮放免」という不自由な生活を強いられるのです。そんな子どもによる絵画作文が絵本になりました。

『ほんのむこうへ』

作／なかいかおり
1,540円（岩崎書店）

物語が大好きな6人の子どもたち。今日も、本の中に入っていきました。何のおはなしかわかりますか？　子どもたちも、あっちこっちで大活躍しています。よく見て探してみましょう。絵の中に隠れているのは、子どもたちだけではありませんよ。

『イグアノドンのツノは なぜきえた？ すがたをかえる恐竜たち』

文・絵／ショーン・ルービン
訳／千葉茂樹
1,760円（岩崎書店）

恐竜の姿は、発見された化石をもとに古生物学者が骨格標本を組み立て、復元画家が絵を描きます。新しい発見があるたびにその姿は変わっていきました。今考えられている姿も、いずれ新発見によって変わるかもしれません。

※JPIC 読書アドバイザーおすすめ！

著作権保護コンテンツ

1～3月のプログラム

プログラム（各10～15分）小学校高学年

1月 テーマ：今年は巳年

❶『へび のみこんだ なに のみこんだ?』
作／tupera tupera
2,200円（えほんの杜）

存在感があり、遠目がききます。横長なので持ち方を工夫して、最後の場面までゆっくりと見せましょう。

❷『へびのクリクター』
作／トミー・ウンゲラー　訳／中野完二
1,100円（文化出版局）

息子から母に贈られた1匹のヘビをめぐるおはなし。前半に出てくる長いヘビの種類もテンポよくしっかり伝えましょう。

❸『ヘビと船長 フランス・バスクのむかしばなし』
文／ふしみみさを　絵／ポール・コックス
1,760円（BL出版）

読む順序に注意して、必要に応じて絵を指でさしながら読んでください。鮮やかな色彩と展開のおもしろさに引き込まれます。

2月 テーマ：コートをめぐるおはなし

❶『おじいちゃんのコート』
文／ジム・エイルズワース　絵／バーバラ・マクリントック
訳／福本友美子
1,760円（ほるぷ出版）

祖父の人生に寄り添った1着のコート。影も形もなくなっても、決してなくならないものがあることに心が動かされます。

❷『アンナの赤いオーバー』
文／ハリエット・ジィーフェルト　絵／アニタ・ローベル
訳／松川真弓
1,430円（評論社）

何もかもが不足していた時代、1着の上着をあつらえるには大変な手間がかかりました。中表紙の絵もよく見せて。

3月 テーマ：サクラ咲く季節に

❶『さくらがさくと』
作／とうごうなりさ
1,540円（福音館書店）

何げなく目にしているサクラが、急に身近な存在に感じられます。大きめの本なので、左右どちらかが下がらないよう、持ち方に気をつけて。

❷『エリザとさくらのものがたり』
文／小手鞠るい　絵／大野八生
1,760円（少年写真新聞社）

日本のサクラが海を越えてアメリカでも愛されるようになるまでの、史実に基づくおはなし。エリザの平和への思いを最後のページまで大切に。

（古市未央）

プログラム（各10～15分）小学校中学年

1月 テーマ：にゃんともすてき！

❶『ヨルとよる』
作／あさのますみ
絵／よしむらめぐ
1,540円（教育画劇）

同じ時間の違う世界がひとつに重なります。ともに過ごすことで知る驚きや発見、共感のイメージをふくらませて読んでみましょう。

❷『どろぼうねこの おやぶんさん』
文／小松申尚
絵／かのうかりん
1,320円（文芸社）

どろぼうネコの恩返し。のんびりとした毎日と、手助けを決意したところで場の雰囲気が変わります。ここが読み方の切り替えポイント。

2月 テーマ：大豆の日

❶『おおいなる だいずいちぞく』
作／はしもとえつよ
1,650円（偕成社）

大豆の育ち方と変身が楽しくわかります。「マメちしき」はその場に合わせて読まなくても大丈夫。とにかく、楽しくを一番に。

❷『おふくさん』
文・絵／服部美法
1,430円（大日本図書）

豆で追いはらいたい怖い鬼も、おふくさんの手にかかれば怖くない。おはなしと一緒に、子どもたちとにらめっこも楽しんでみてはいかが。

3月 テーマ：本があなたを呼んでいます！

❶『これは本』
作／レイン・スミス
訳／青山 南
1,430円（BL出版）

パソコンの得意なロバくんと、本の好きなサルくんのやりとりがおもしろいです。ふたりの会話の進み方に強弱を。文字なしページも大切に。

❷『ぼくは なんの ほん?』
作／カロリーナ・ラベイ
訳／はせがわけい
1,870円（光文社）

本を手にとってもらう。読んでみる。繰り返し読む。伝える。たくさんの本が、ダスティーのようになったらすてきですね。その気持ちとぬくもりを、読みきかせの言葉に添えて。

（増田穂里）

プログラム（各10～15分）小学校低学年

1月 テーマ：よい一年でありますように

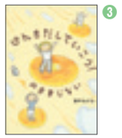
❶『えんぎがいい』
作／雨宮尚子
品切れ中（白泉社）

縁起もので多種多様だね。タコさんまでとは驚き。みんなの縁起がいいものは何かな？

❷『おおきな かべが あったとさ』
文／サトシン　絵／広瀬克也
1,650円（文溪堂）

目の前の試練は大きな川。「どうする、どうする？」。子どもたちと一緒に考えてみませんか？

❸『げんきだしていこう！のおまじない』
作／西平あかね
1,430円（大日本図書）



読み終わったらみんなで「ふっとんだ～」をやってみよう！　ねっ、いい気分になるでしょ。

2月 テーマ：2月の主役はわれら鬼

❶『オニの ふろめぐり』
作／岡田よしたか
1,320円（小学館）

ポンポン飛び交う大阪弁が魅力です。でも、お風呂で大谷選手の真似は「あかん、あかん」。

❷『こんにちは おにさん』
作／内田麟太郎　絵／広野多珂子
1,100円（教育画劇）

鬼は乱暴者で恐ろしい？　いえいえ鬼のイメージが一変、友だちになりたくなる本です。

❸『いろいろ おにあそび』
作／加古里子
1,100円（福音館書店）

これこそ鬼が主役、いないと始まりません。さて、今日は何の鬼遊びをしますか？

3月 テーマ：春を呼ぶ音

❶『つららが ぽーっとん』
文／小野寺悦子　絵／藤枝つう
品切れ中（福音館書店）

つららから落ちるしずくの音で、春との距離がわかります。しずくの速度を大切に。Allegretto（やや速く）になると……、近い近い、春は近い。

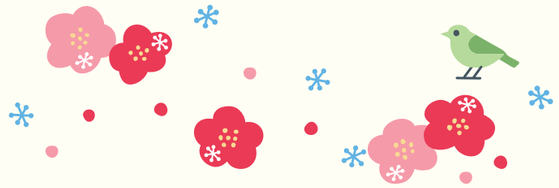
❷『めざましくん』
作・絵／深見春夫
1,870円（徳間書店）

春を起こすなんて超最強の音。刻々と変化するめざましくんの顔（文字盤）にも注目です。

❸『はるかぜのたいこ』
作／安房直子　絵／葉 祥明
1,430円（金の星社）

たたくたびに春が浮かびあがります。なんてすてきな太鼓！　クマのお店には秋風や冬風、いろんな季節の太鼓も売っているのかなぁ。

（岩井淳子）



対象別おはなし会のプログラムです。ここで紹介する絵本や紙芝居は、ご家庭での読みきかせにもおすすめです。ブックガイドとしてもご活用ください。

行事絵本・季節の絵本

干支・巳

『ヘビのひみつ』
写真・文／内山りゅう　1,320円（ポプラ社）

2025年の干支は「巳（ヘビ）」。ちょっと変わっていて、苦手という人も多い生きもののひとつですが、実は不思議で、おもしろい秘密がいっぱいあるようです。

旅立ち

『たくさんのドア』
文／アリスン・マギー　絵／ユ・テウン　訳／なかがわちひろ
1,540円（主婦の友社）

あなたはこれから、たくさんのドアを開けながら進んでいきます。ドアの向こうには、何があるのでしょう？　不安なことがあっても大丈夫。あなたは守られていますよ。

紙芝居

『たのしみだな、おしょうがつ』
脚本／あべしまこ　絵／土田義晴
2,090円（童心社）

ふうたは、おじいちゃんの家の物置で、使わなくなっていた杵と臼を見つけました。押し入れでは知らないおもちゃも見つけ、お正月が楽しみになりました。

紙芝居

『こんやは まめまき おには そと！』
脚本／すとうあさえ　絵／夏目尚吾
2,090円（童心社）

節分の日、たぬきちは、おばあちゃんに豆まきの豆を届けに行きます。途中で出会った友だちにも分けていたら、豆はどんどん減ってしまいました。

紙芝居

『ながぐつをはいたねこ』
原作／ペロー　脚本・絵／堀内誠一
3,080円（童心社）

父親が死んで、途方に暮れる若者を救ったのは、少し変わった1匹のネコでした。そのネコは、口をきいたのです。そして、奇想天外な方法を実行していきました。

（安冨ゆかり）

※当財団（JPIC）では読書を通して国民の生涯学習推進・読書活動の推進のために、1993年より「JPIC読書アドバイザー養成講座」を開設。読書や出版について体系的に学習する講座です。
JPIC読書アドバイザークラブ（JRAC）とはこの講座の修了生の有志により自主活動しているクラブ。全国に約660名が在籍、地域のおはなし会などで活躍しています。

著作権保護コンテンツ

第18回

保育者のたまごたちと絵本

保育現場の先生たちは、養成校で絵本についてどのように学んできたのでしょうか。
東京成徳短期大学の事例を大國ゆきのさんに伺う2回目です。

取材・文／荒木晶子

無理に言葉にさせないことが生む“ふくらみ”を感じられる保育者になってほしい

保育実習室には、教材やおもちゃを整理・保管する倉庫を併設。保育する子どもの年齢や発達の程度に応じてセッティングします。

保育実習室の保育室スペースには、子どもサイズの机やイスが置かれています。保育実習室の隣にあるトイレも子どもサイズです。

多くの授業で絵本を使い絵本を通して学んでいる

本学では、本当にいろいろな教員が、多くの授業で絵本を取り上げています。幼稚園教諭免許状取得のための「教育実習指導」、保育士資格取得のための「保育実習指導Ⅰ」では、1年のときから絵本を必ず取り扱います。読みきかせの準備や方法、絵本の持ち方やめくり方などを教えたあと、小グループに分かれて互いに「読みあい」を行うグループワークや、みんなの前でクラス全体に向けて読みきかせなどを行います。

また、幼児教育科長・松本純子教授のゼミでは、特に絵本を通した学びを意識しています。幼稚園実習を終え、自信を持って絵本を手にとることができるようになったタイミングで、学生同士で「読みきかせごっこ」をしたり、こども園を訪ねて実際に読みきかせをしたりといった活動を通して、絵本に対する認識を深めるとともに、学生の意欲を引き出すようにしています。

絵本の読みきかせには正解があるわけではない

絵本を取り上げる授業のひとつ、「子どもの文化と言葉」では、絵本をはじめとした言葉に関する児童文化財を最も多く取り扱っています。子どもの遊びを豊かに展開するために必要な、絵本や紙芝居、人形劇、ストーリーテリングなどの児童文化財にはそれぞれ特徴や強みがあります。その中で絵本は、読み手と聞き手との親密な関係性のうえで成り立ち、肉声で伝えることに意味があるといった特徴や強みがあることを紹介しています。

その背景には、学生にも園で出会う保護者たちにも、「うまく読めないから読まない」という人が少なくないことがあります。もちろん、絵本を魅力的に読むスキルがあるのはいいことですが、絵本の読みきかせには正解があるわけではありません。スキルにこだわるよりも、絵本を通して自分なりに子どもとのあたたかな時間を共有することを大切にしましょう、と伝えているそうです。

絵本の読みきかせや模擬保育などに保育実習室を活用

絵本の読みきかせは、本学内の「保育実習室」で行うこともあります。保育実習室は、中規模サイズの部屋の中に講義室スペースとコルク敷き・床暖房完備の保育室スペースがあり、学生は授業中に両方を移動しながら学びます。

絵本の読みきかせだけでなく、「保育指導法演習」では模擬保育やベテラン保育者による保育を子どもの立場で受ける体験、「保育カリキュラム論」や「乳児保育Ⅱ」では幼児教育や乳児保育における「環境構成」を考える場としても活用しています。私のゼミでも、学生の要望に応え、この保育室に近隣の親子や本学卒業生親子に来ていただいて、ふれあう機会を持ちました。

そのほか、図書館には学生たちが借りられるよう、絵本が約4900冊、紙芝居が約600点並び、大型絵本なども多数収蔵しています。各教員の研究室などにも、本学の予算で購入されて本学図書として所蔵されている絵本が図書館とは別に130冊以上あり、それ以外にそれぞれが私費で購入した絵本や児童書も置いて、学生たちに紹介しています。

絵本を通して心が動く体験や自分の心世界に浸る体験を

保育では季節感をとても大事にしているので、季節に合わない絵本を読みきかせることはありません。そのことは将来の保育者として知っておいてほしいので、私は授業のテーマとは別に、学生が季節はずれの絵本を取り上げようとしたらそのつど伝えるようにしています。

でも、絵本を学ぶことを通して本当に学生に望んでいるのは、心が動く体験やおはなしを共有する中で他者と心がひとつになるような体験をしてほしいということです。それが、子どもとのかかわりにもつながっていくと思っています。

その一方で、深く自分の心の世界に浸っていくような体験をしてほしいとも思っています。絵本や児童書という心を揺らすものを通して、自分の心のヒダ、奥行きを感じることが、将来出会う子どもたちひとりひとりの心のヒダを尊重できることにつながるのではないかと思うからです。

ただ、私は、「絵本や児童書の読み手の主役」は子どもにしたいと思っています。私は書店を営む母のもとで本に囲まれて育ちました。子どものころに読んだり、自分の子どもたちが育つ中で出合った絵本や児童書は、私の心の宝物です。私自身もそうでしたが、子どもはやがて自分で本を読むようになり、絵本を卒業していきます。

だからこそ、その読み手は子どもを主役にしたい。その意味で、保育者は絵本や児童書にだけ詳しければいいとも思いません。本当に深い読書体験をし、読み手として成長していくことが、子どもが絵本や児童書の世界に没頭してその中を生きる、そういう心を感じとれることとリンクしていると思うのです。

昨今、保育の現場では、読みきかせ後に「何が出たか」「どんなことを言ったか」などを子どもたちに尋ねたり、感想を言わせたりすることもあるようです。それでは、子どもは「おはなしの世界」をちゃんと感じきることができません。学生たちには、無理に言葉にさせないことが生む「ふくらみ」を感じとれるような保育者になってほしい。それがいちばんの願いかもしれません。

大國ゆきの
おおくに・ゆきの
東京成徳短期大学幼児教育科教授。発達相談などに従事したあと、1995年より保育者養成にあたる。発達心理学・子ども家庭支援の心理学などを担当。最近、かつての教え子の子どもたちが入学してくれることが増えてとてもうれしく思っている。

すべての子どもたちに笑顔を

第15回

支援の必要な子と絵本

親子で絵本を楽しみたいと“てんやく絵本”を考案し、その製作と全国への無料貸し出しを行う「てんやく絵本 ふれあい文庫」を主宰する、岩田美津子さん。前号に続き今号では、岩田さんが代表を務める「点字つき絵本の出版と普及を考える会」の成り立ちと、親子で絵本を読むことの大切さについて、お話しいただきます。

取材・文／小山まゆみ

岩田美津子
いわた・みつこ
1952年福岡県生まれ。福岡県立北九州盲学校卒業。84年、自宅に「点訳絵本の会 岩田文庫」を開設、てんやく絵本の製作と貸し出しを始める。96年、点字つき絵本『チョキチョキ チョッキン』を出版。98年4月「IBBY朝日国際児童図書普及賞」受賞。「点字つき絵本の出版と普及を考える会」代表。

点字つき絵本の普及は横のつながりのおかげ

1996年秋に出版した、国内初のフルカラーの点字つき絵本『チョキチョキ チョッキン』を足がかりにし、点字つきさわる絵本の出版にもっと積極的に取り組んでもらえたら……。そんな願いを込め、2002年4月、出版社と印刷会社、そして、子どもの本の関係者に呼びかけ、「点字つき絵本の出版と普及を考える会」を発足させました。

会では最初に、約70社の出版社に呼びかけて情報を収集し、さわって楽しめる絵本のリストを作成しました。このリストは定期的に改訂されており、現在は第8版になっています。

その後、07年に小学館が『きかんしゃトーマス なかまがいっぱい』『ドラえもん あそびがいっぱい』の2冊を点字つきさわる絵本として出版。これをきっかけに、他の出版社も少しずつ点字つきさわる絵本を製作するようになり、現在では約30冊の点字つきさわる絵本が出版されています。

この会の素晴らしいところは、点字つきさわる絵本を出版したいと考えている出版社の担当者が、すでに点字つきさわる絵本を出版している他の出版社の担当者からアドバイスをもらったり、情報交換したりできる横のつながりがあることです。ふだんは子どもの本を出版しているライバル同士ですから、よその会社に行って、「おたくでは点字つきさわる絵本を出していますけど、どうやって出したのですか」とは到底聞けないでしょう。点字つきさわる絵本に一から向き合うとなると、完成までに相当の時間がかかります。やはり、この会がなかったら、出版物としての点字つきさわる絵本も、ここまで増えることはなかったのかもしれません。

「てんやく絵本」づくりで大切なことは3つ

「ふれあい文庫」で貸し出すための、手づくりの〝てんやく絵本〟を製作してくださるボランティアの方は、現在、日本全国に約100人います。ピーク時は年間300～350冊の〝てんやく絵本〟を製作していましたが、コロナ禍の影響や高齢化で引退した方もいて、現在製作している冊数は、年間250冊くらいになっています。

〝てんやく絵本〟の製作において、大事にしていることが3つあります。

まずひとつ目は、作者の意図を壊さないことです。〝てんやく絵本〟にする際は、市販の絵本に、絵の形に切り抜いたシートを貼り、絵の説明を点字で書き添えます。絵のシートを貼る際、雑に貼って形を壊してしまったら、作者の意図とは違うものになるでしょう。説明文にしても、おかしな文章を書いたら、作者の意図を壊してしまいます。

絵本は、見えない人、見える人にかかわらず、読者が読んで、さわって、自由に感じ取っていいもののはずです。その意味でも、点訳者が感じたことを説明文に書くのは、絶対に御法度です。もちろん、点訳者が「作者はこんな意図で書いているのだろうな」と感じるのは、自由です。でも、それを文章化してしまうと、読者はそれに左右されて、自由に感じることができなくなります。シンプルに、見たものを言葉に代える。それが大切なのです。

ふたつ目は、シートを貼る際に、見える読者にとって、違和感のない貼り方をすることです。たとえば、5㎝四方の絵を点訳者が勝手に3㎝に小さくしたり、シートを深く重ねて貼るのは、ダメ。このようなことをしてしまうと、シートを貼った絵と、その後ろにある絵が違うものになってしまいます。

そして、みつつ目は、見えない読者にとって、わかりやすい絵の表し方をすることです。見える人に違和感のないようシートを貼ることと、見えない人にわかりやすい絵の表し方をすることは相反するのですが、ここは折り合いをつける必要があります。

見えない人にわかりやすい表現の仕方というのは、絵を貼るほうがわかりやすいのか、説明文にするほうがわかりやすいのか、適切な選択をすることです。これについては、勉強してもらうしかないので、点訳者の方には点訳絵本のつくり方のテキストや、つくり方のマニュアルを収めた動画で、学んでいただいています。

親のぬくもりと愛情を子どもは心で受けとる

今年、40周年を迎えた「ふれあい文庫」では、かつてわが子と絵本を楽しむために利用していた方が、今度は孫と楽しみたいといって、利用を再開された例もあります。

親子で絵本を読むことの大切さについて語る際、一般的には子どもの思考力や想像力の向上があげられます。しかし、それだけではありません。私は、子どもをひざにのせて、親子で1冊の絵本を楽しむことによって、子どもは親のぬくもりと愛情を心で受けとっていると考えています。肌のぬくもりや親の愛情は形にならないものであり、目に見えるものではありません。しかし、子どもは抱きしめられると心が安定します。ひざの上で感じとった親のぬくもりは、安心感へとつながっていくはずです。

これこそが、親子で絵本を楽しむことの原点であると、私は思っています。親から愛情とぬくもりをしっかり受けとった子どもは、大きくなって他人を傷つけるようなことはしないでしょう。

また、私の中には、絵本は「見るもの」という概念を、「見て、さわるもの」に変えていきたいという思いがあります。視覚で絵本を楽しみ、指でふれて、その指先から伝わる感覚を感じながら、さまざまなことを想像することで、子どもたちの想像力はさらに広がると信じています。

読みきかせの活動をされているみなさんも、ぜひ子どもたちが見て、聞いて、ふれて、全身で楽しむ体験を促していただけると、とてもうれしく思います。

目が不自由なことをテーマにした絵本

『ぼくは まっくろ』
文／原 陽子
絵／山本久美子
1,320円（リーブル）
口口は盲導犬の候補として生まれ、訓練を受けたのち、ユーザーのしゅうくんと出会いました。最初は下ばかり見ていたしゅうくんでしたが、次第にできることや行ける場所が増えて世界が広がりました。そして、10年をともに過ごします。

『わたしのくつしたはどこ？ ゆめみるアデラと目のおはなし』
文／フロレンシア・エレラ　絵／ベルナルディータ・オヘダ
訳／あみのまきこ　1,870円（岩崎書店）
最初は、お気に入りの赤い靴下が見つからないという些細なことでした。通い慣れた職場への道を間違えたり、研究でフラスコを取り違えたり……。穴あき絵本ですが、ページをめくるたび、その穴が小さくなっていきます。それが、アデラが見えている視野だと気づいたとき、アデラとともに読者もこの先どうしたらいいのか、考えます。